

第6章 : 率先垂範できない自分 ～ 覚悟が足りない ～

●黒田

それは突然のことだった。
今日から2日間、木下さんがいない。

「明日から2日間ボクは特別な研修に行きます。
困ることもあるかもしれないけど、2人なら大丈夫。何とか乗り切ってください」

昨日そう言っていた。なんでもMIC研修だそうだ。

今日は、先日とったアポイントの日。この日は施工部も空き人員がいなくて、木下さんと2人で訪問するはずだった。急なため、他の先輩営業マンは皆、別の訪問が入っていてオレに同行できる人はいない。オレは初めて1人でお客さま宅に訪問することになった。

今まで何度かアポイント先に訪問してヒアリングしたが、ほとんど木下さんが対応していたため、オレは横で話を聞いているだけだった。

何度か話は聞いたので、自分でもできると思う。
むしろ、はやく自分でやってみたいと言う気持ちが高まっていたオレは、1人でいけることをラッキーだと思った。

オレが何を言っても横から口を出したり、後から注意する人はいない。
オレの気持ちはふわふわと軽かった。

=====

●木下

口では偉そうなことを言っていたけど、ボク自身は何もしていない。

『Hな経営』のP34にはこうある。

…これらの手法よりも間違いなく効果があり、かつ理念の浸透に欠くことができないのが

「社長による率先垂範」である。

(中略)

企業の大小を問わず、社長が理念と一致した象徴的な行動を取り続ければ、必ず理念は浸透する。反対に社長の言行不一致は、理念浸透をさまたげる最悪の行為であり…

ここにも織田社長はマーカーをひいてあり、これは社長がやることだと思っていたけど、ボクにも当てはまることだと思った。これは社長だけでなく人を指導する立場の人間全員に当てはまることだろう。黒田に要求していることをボク自身ができている。ボクは率先垂範という言葉のどこにもかすっていない。

それでも、感謝心のない黒田は、なぜか成果を上げている。
もう、どうすればいいのか分からない。
ボクは耐え切れなくなって社長に相談することにした。

「社長、お話があるのですが」

「どうした、改まって。スゴイ顔してるぞ」

「今はどうしても外せないから、昼でも大丈夫か？飯でも食いながらどうだ？」

お昼休みに社長の時間をもらえた。
午前中は仕事が手につかない。

社長になんて言われるだろう。
教育係のくせに自分では何もできていないボクを知ったらがっかりするだろう。
そう想像すると気が重くなった。

社長とは近くの Pasta 屋に行った。少し高めのお店なので同僚が来ることはない。

「オレはこのポルチーニのパスタだな、木下は？」

「あ、ボクも同じので…」

「大盛りにするか？」

「いえ…」

「大盛りにしとけ！今日はおごってやるから」

注文を終えると社長は言った。

「で？」

社長のその「で」で、ボクの緊張感は一気に高まった。
いよいよボクは社長に顛末を話した。

社長はボクの顔をジッと見ながら、うんうん頷いて聞いてくれる。

「ですので、ボクを教育係から外して欲しいんです」

「なるほどなあ〜。そろそろきたか」

社長は何やら少し考え込んだが、悩んでいるというよりは楽しんでいるように見えた。

「お前は外さないよ」

「えっ!？」

「お前は外さん」

「…どうしてでしょうか？ ボクより適任はいっぱいいるかと…」

「とにかく、お前は外さない。でも木下が悩んでいることも分かった。木下もそのステージに来たってことだ」

「…どういうことでしょう」

「まあいい。手配するから少し待ってけ」

この話はそれで終わってしまった。

社長はご機嫌でパスタを食べ終わると1人で先に会社に戻って行った。

ボクは1人残ってしばらく考えた。

どういうことだろう…。そのステージって。

何で社長は嬉しそうだったんだ？ボクはダメダメなのに…。

3日ほどして社長から呼ばれた。

「明日から2日間MIC研修に行って来い。アッシュの平川さんをお願いしておいたから」

突然のことにボクはびっくりした。

織田リフォームの若手5人が2日間みっちり研修を受けることになった。
社長いわく「未来の幹部たち」だそうだ。

アッシュさんの研修を受けられるのは嬉しかった。
今のボクに必要なヒントをくれるのだろうという期待があった。

「でも、どうして急に…」

そうは行っても社長のことだ。
きっといろいろと考えてのことだろう。
ボクは社長を信じて、研修へ向かった。

MIC研修では自分の内面を深く掘り下げられた。

1人ずつ時間を取って、平川さんや他の受講メンバーから質問に答えながら進めていく。
すると、自分の内面がどんどんさらけ出され、最後には根っこにある課題が浮き彫りになる。2時間でちょっと課題を見つけられる者もいれば、5時間以上の時間を要した者もいた。
自分の根っこの課題に当たった時、ボクは未熟すぎる自分が悔しくて涙を流した。

ボクの課題は『覚悟が足りないこと』だった。
自分が新人教育係を担当しているけど、どこかで「社長に無理やり任命されたから」とか
「ピンチの時にはアッシュさんが助けてくれる」と心に逃げ道を作っていた。
だから、本気になって新人を知ろうともしなかったし、絶対に成長させたいという思いも
なかった。自ら率先して動くよりも、口で指示をして楽をしようとしていた自分が見つかった。
責任から逃げていたということだ。

MIC研修でボクの行動目標が2つ決まった。

ひとつは、「新人に指示することは、まず自分が率先して行動し、体で見本を見せること」
もう一つは、「新人全員と1日1回は仕事以外の話をする事」

ボクはこの研修の中で、漠然とした不安が明確な課題に変わった。全くできていない自分が浮き彫りになり焦りも感じたが、やるべきことが明確になったので、気は楽になった。
いや気はグッと引き締まった。